

# 埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<Note> Notes on the Hyakuman-to (One Million Wooden Small Pagodas) : From a Viewpoint of Buddhist History in the Nara Era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯浅, 吉美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/975">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/975</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 百万塔の思想的背景

## 南都仏教史における位置付けを考える

Notes on the *Hyakuman - tô* (One Million Wooden Small Pagodas)

From a Viewpoint of Buddhist History in the Nara Era

湯 浅 吉 美

YUASA, Yoshimi

### 1. はじめに

天平宝字8年(764)9月に起こった恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱を鎮定すると、乱後の国家安寧を祈らなうがため、称徳天皇は木造三重小塔百万基の造立を発願した。それが百万塔である。塔そのものは掌に乗るほどの大きさだが、何よりもその数の龐大さに驚かされる。また、塔身の中に『無垢浄光大陀羅尼經』を出典とする陀羅尼が納められており、制作年代の明確なものとしては、世界最古の印刷物とされている。日本史上、空前にしておそらくは絶後の一大プロジェクトであるとともに、世界でも屈指の仏教的文化遺産の一つに数えられることは間違いない<sup>1</sup>。

本稿では、百万塔および陀羅尼をめぐるこれまで謎とされてきた、あるいはほとんど検討されることのなかった点につき、いささか新見解を提示する。それは、

- ・経文には六種の陀羅尼が挙げられていながら、四種しか現存しない点
- ・六度陀羅尼だけが極端に数少ない点
- ・百万という数のもつ意味

・ 建築した人物は誰か

などである。筆者は、『梵網經』と、そこに説かれる蓮華蔵世界觀とをキーワードとして、百万塔プロジェクトを奈良時代仏教史の中に整合的に位置付けることができた<sup>2</sup>。大いに当否を問うてみたい。

### 2. 『無垢浄光大陀羅尼經』について

百万塔陀羅尼の出典、『無垢浄光大陀羅尼經』は仏塔修造の功德を説く經典である。唐代の弥陀山三蔵によって漢訳された。ちょうど則天武後の末年、日本では奈良時代の幕が開こうとする時に当たる<sup>3</sup>。禿氏祐祥は、日本に本經をもたらしたのは玄昉であったと考えている。玄昉は養老元年(717)に留学僧として入唐し、天平7年(735)に帰国する際、『開元釈教録』所載の仏典5千余巻を請来した。本經は『開元釈教録』に記載されている一方、天平9・10年の正倉院文書に所見があるという。従うべき見解であろう(文献2)。下に經典の梗概を記す<sup>4</sup>。

迦毘羅城下でのこと。劫比羅戰荼なる外道

キーワード：百万塔、蓮華蔵世界、良弁、南都仏教、奈良時代

Key words : the *Hyakuman - tô*, the *Renge - zô* cosmology, *Rôben*, the *Nanto* Buddhism, the Nara era

の大婆羅門が人相見の名人から死期の近いことを告げられ、世尊に救いを求めてくる。世尊はその求めに応じて婆羅門に仏塔修造の功德を説くが、居合わせた除蓋障菩薩の請を受けて、さらに詳しく「最勝無垢清浄光明大壇場法」と名付ける法を説く。まず個別に、**根本陀羅尼法**、**相輪櫺中陀羅尼法**、**修造仏塔陀羅尼法**、**自心印陀羅尼法**の順に、それぞれ陀羅尼の呪文、供養の仕方、その功德が記される。ただし自心印陀羅尼は、根本、相輪、修造と聴聞してきた除蓋障菩薩が説いたもの。次に世尊は金剛大夜叉主の問に答えて**大功德聚陀羅尼**を説き、最後に六波羅蜜陀羅尼（いわゆる**六度**）を説く。そして除蓋障菩薩をはじめ、一同の歡喜讚嘆をもって終わる。

全体を通して見ると、六種の陀羅尼が均質に並んでいるわけではないことがわかる。と言うのは、根本、相輪、修造の三者は一連のもので仏説、自心印は前三者を踏まえての除蓋障菩薩説、以上の四者をばまとめて「四大陀羅尼呪」と称している。あとの二つは、四大陀羅尼呪を供養するに当たって、延寿招福を願うならば大功德聚陀羅尼を誦念し、六波羅蜜満足を求めるならば六度を誦せよ、という具合である。また供養の仕方も異なり、四大陀羅尼呪はそれを書写すべきことをいうが、後二者はもっぱら誦するものとして説かれている。さらに、四大陀羅尼呪は各々「何々陀羅尼法」と名付けられているのに対し、後二者にはそのようなことがない。実のところ、大功德聚陀羅尼と六波羅蜜（六度）陀羅尼という呼び方も、便宜的にそう呼んでいるだけで、經典本文に出てくる語ではない。このように六種の陀羅尼は、その重みに差のあるこ

とが察せられるし、後に見る如く、百万塔の在り方にとって、これが意外と重要な意味をもつのである。

次に、本經の所説に従って得られる果報はどのようなものであろうか。換言すれば、どのようなことを期待できるのであろうか。その答えは第一の根本陀羅尼法の個所に集中的に記されている。大概を要約すれば、寿命を延べ、地獄・餓鬼・畜生など諸々の悪趣を離れることを得、一切の所願みな満足し、一切の病および諸々の煩惱も悉く消除する。まさに死せんとする病者の命を繋ぎ、意識を回復させ、あるいは亡者をして天上界ないし兜率天宮に生ぜしめる等々。もともと死期近く、地獄に墮ちると予言された婆羅門に対する説教ゆえ、これは当然のところとして首肯できる。しかしそれ以上に注意すべきことは、いわゆる鎮護国家的な効果をもたらすことが記されている点である。訓み下し文を示す。

かの国土にして、もしは諸悪の先相現るる時あらば、その塔即ちたちまちに神変を現じ、大光焰を出だし、かの諸悪不祥の事をして殄滅せざるは無し。もしはまた彼に悪心の衆生あり、あるいはこの怨讐及び怨伴侶、ならびに諸の劫盜寇賊等の類、この国を壊さんとおもわば、その塔またたちまちに大火光を出だし、即ちその処に諸の兵仗を現じ、悪賊、見おわって自ずからに退散せん。

このように国土擁護のことが功德として述べられている。また六度陀羅尼の個所にも、

呪の威力をもってこの人を擁護し、諸の怨家および怨朋党、一切の夜叉、羅刹、富単

那等をして、皆、この人に悪をなすことあ  
たわず、おのおの恐怖を懐き、諸方に逃散  
せしむ。

との文言が見える。

そもそも百万塔の造立は、恵美押勝の乱の  
平定後、押勝一派の鎮霊と以後の国家安穩と  
を念じて発願されたものである。その沿革を  
語る唯一の史料たる『続日本紀』神護景雲4  
年(770)4月戊午(26日)条を訓み下して次  
に示す<sup>5</sup>。

初め天皇、八年の乱平らぎて、すなわち弘  
願を発し、三重小塔一百万基を造らしめた  
まう。高さ各四寸五分、その径、三寸五分。  
露盤の下に、おのおの根本、慈心、相輪、  
六度等の陀羅尼を置く。是に至りて功畢り、  
諸寺に分ち置く。事に供する官人已下仕  
丁已上一百五十七人に爵を賜ること、おの  
おの差あり。

「八年乱平」とあるのが天平宝字8年(764)  
9月に起こった恵美押勝の乱を意味すること  
は明らかである。また、これが正に現存する  
百万塔を指す記述であることも、「高各四寸  
五分。其径三寸五分」と「根本。慈心。相輪。  
六度等陀羅尼」の文言によって証される<sup>6</sup>。そ  
のような目的をもった事業であってみれば、  
前記、根本と六度に説く鎮護国家の功德は、  
まことに趣意に適ったものと言える。その他  
の個所で繰り返し説かれる寿命延長とか罪業  
消滅といった功德は、陀羅尼の呪力が自己に  
向かって発現するわけで、この目的のためには  
重要でない。強いて言えば、根本陀羅尼法  
によって得られる国土擁護と、六度の保障す  
る玉体安康こそが、百万塔陀羅尼の眼目。こ

のことを等閑視しては、百万塔造立の意味を  
見失うことになる。

### 3. 供養の所作

次に供養の所作を概観する。またそれと関  
連して、陀羅尼がはじめから現存の四種だけ  
であったか否かについても言及する。

四大陀羅尼呪と呼ばれる根本、相輪、修造、  
自心印については、それぞれ個別に供養法が  
説明される。大体において共通する要素だけ  
を箇条書きに記すと、

- ・陀羅尼を書写する
  - ・方壇を築く(「修造」では塔を造り、また  
は補修する)
  - ・壇場や塔に香華・香水・飲食等を供え、  
莊嚴する
  - ・壇の四周、塔中などに陀羅尼を置く
  - ・右邊礼拝しながら陀羅尼を念誦する
- となる。ところが、書写する本数や誦する回  
数には少なからぬ違いがある。

【根本】書写すること、右邊すること、誦  
すること、小泥塔を作ること、すべて  
七十七。

【相輪】書写すること、九十九本。

【修造】呪すること、一千八遍。

【自心印】書写すること、九十九本。その  
他に、仏塔を右邊し誦すること、百六  
遍から一万一千遍まで二十段階に分け  
て如来地に達するまでを説く。

それに対し、大功德聚と六度は以下のよう  
に説かれる。

【大功德聚】もし比丘・比丘尼・優婆塞・優  
婆夷、大功德聚を満足し得んとおもわ  
ば、まさに前法に依りてこの四大陀羅  
尼呪法王各九十九本を書写すべし。然  
る後、仏塔の前に一の方壇を造り、牛

糞をもって地に塗れ。（中略）陀羅尼呪をもつて相輪櫛中および塔の四周に置き、呪王法をもつて塔内に置け。十方の仏を想い、至心にこの陀羅尼を誦念せよ。

【六度】もしまた人ありて、六波羅蜜を満足することを得んとおもわば、まさに方壇を作り、まず牛糞をもつて塗るべし。（中略）前の四種陀羅尼呪各九十九本を写し、手ずから小塔を作り、九十九を満たし、この塔中に各一本を置け。その相輪呪をまた小塔相輪櫛中に置け。壇上に行列し、もろもろの香花をもつて供養し、旋遶すること七遍、この陀羅尼を誦せよ。

このように供養の仕方を整理してみると、現在われわれが一般に理解している百万塔陀羅尼の在り方は、六波羅蜜陀羅尼（六度）の個所に記す供養法に最も近いと言えるが、しかし、全く同じではない。根本から自心印までの四大陀羅尼各九十九本を書写するのはよいとして、そのあとを文字通りに読めば、九十九基の小塔の中に四大陀羅尼各一本ずつを納めることになる。そして「六度」は唱えるのであって、書写して塔中に納めるわけではない。つまり百万塔陀羅尼は、たしかに経文の出典は『無垢浄光大陀羅尼經』に相違ないものの、百万という数や諸寺に分置するということが同経に由来していないことは明らかである。

必ずしも経文のとおりで作ったのではないということは、夙に平子鐸嶺によって指摘されている。平子はこのことを、陀羅尼が六種完備ではなく最初から四種であったとする説の論拠として使っているが、にわかには賛同し難い。なるほど、唯一の史料たる『続紀』

には「各置根本。慈心。相輪。六度等陀羅尼」という文言がある。そして、現存する陀羅尼がその四種に限られることは動かし難い事実である。『続紀』に見えない二種が見事に一片も残らず失われたと考えることは偶然に過ぎ、はじめから修造と大功徳聚の二種は無かったと見るほうが自然ではある。しかし上述の如く、経文では修造までを総称して四大陀羅尼といい、大功徳聚と六度の供養法では明らかに四種同列のセットとして扱っているし、その中から修造だけを除く理由は全く見当たらない。もし除くのなら、仏説でない自心印を除くほうが理に適うのではないか。これは消極的ながらも、当初は修造が存在した可能性を示唆する。さらに、『続紀』が自心印を「慈心」と誤っているのは、机上で編纂に当たった『続紀』編者が、実は百万塔の現状をよく知らなかった様子を窺わせるかと思う。

また、従来は一向に注意されなかったと見えるが、次に掲げるような史料がある。すなわち、『七大寺巡礼私記』元興寺吉祥堂条に、

この堂は金堂の坤の角にあり。光明皇后の御願なり。八万四千の小塔（轆轤曳き、高さ七寸ばかり）を安置す。ゆえに小塔（院）となづく。この塔はおのおの無垢浄光陀羅尼經の五真言の内、その一本を納むと云々。仁和寺の勝定房阿闍梨の説なりと云々。  
（原漢文）

と見える<sup>7</sup>。各々の小塔に「五真言」のうちの一本が納められていることが明記されている。続く「仁和寺勝定房阿闍梨説云々」との文言から、撰者大江親通も実見の上で記したのではないことが知られるが、とにかく五種の陀羅尼が存在したことを伝える唯一の史料であ

る。平子鐸嶺は相当強烈な筆致で「当初から四種のみ」とする説を述べ、「実物の検覈を怠り、古記のいふ所を考査せずして、ひたぶるに想像をたつるは抑妄なり」とまで言うが、当人はこの一文を引用するに当たり、いかなる事情からか「五」の一字を脱している。むしろ平子自身、現物が四種しか存在しない事実を引きずられて「古記のいふ所を考査」していない、と評しうるように思う。

ただし、はじめは六種あったという説をなすならば、解決しなければならぬ難題がある。それは陀羅尼の包紙に見える番号と、塔身にある番号刻印である。平子鐸嶺は包紙の番号が根本＝一、相輪＝二、自心印＝三、六度＝四であることを、例外なく確認したと報じている。もしも修造が刷られたのなら、それが三となり、自心印は四になる。また大功德聚があれば五になって、六度は六になるはず、という。一方、刻印についても四までしかなく、五・六は見当たらない(文献5、金子裕之)。この二点は「当初から四種」説の強力な論拠である。これに異を唱えるのは見苦しい屁理屈と思われるかもしれないが、あえて挙げておこう。

- ・包紙でくるんだ状態が奈良時代の原状のままであるという確証は無い<sup>8</sup>
- ・刻印の存する塔身は2千点弱で、全数のもとより、現存数(4万5千余)に比してもごく僅かであり、定性的に全体に敷衍するのは危険ではないか
- ・二種の陀羅尼を除外する積極的な理由が見当たらない

そこで筆者の私見を提示すると、やはり六種全て刷られたものと思う。もしくは大功德聚を除く五種類であったかもしれない。そして根本から自心印までの四大陀羅尼を各一本

ずつ、合計四本を一つの塔に納め、それが九十九基に達するごとに、百基めには大功德聚または六度を納めたと見る。このように考える理由は、こうした供養を修する場合、努めて經典のとおりを遵守するのが自然であろうということに尽きる。百万という龐大な数を作ることを決めた以上、明確な理由も無しに一部の陀羅尼を除いても、それは無意味な省力である。

そして同時に、このような供養法を採ったとすれば、六度の残存数が他の三種に比べて極端に少ないことも解釈できる。すなわち、四大陀羅尼各九十九本に対して、六度は一本あればよい。現在、根本1477、相輪1061、自心印1140、六度29という数を算する<sup>9</sup>。上記の如く想像すれば、六度に期待される残存数は十いくつ程度であるから、やや多めながらも適当な数の範囲内と見られ、謎とされてきた六度の少なさを、強ち無理でもなく説明できよう<sup>10</sup>。

またあるいは、十万節塔・一万節塔と呼ばれているやや大きな塔こそ、六度を納めたものだった可能性もあるのではないかと。言うのも、大功德聚と六度の供養の仕方を振り返ってみると、明示されてはいないものの、小塔に納める四大陀羅尼に対し、これら二種を「相輪櫓」の中に置けと言っているようにも受け取れる節がある。相輪櫓とは柱の上に塔の相輪を取り付けて地上に建てるもので、柱の中には經典を納める。現に比叡山西塔や日光山輪王寺などに存するが、形としては正に十万節塔・一万節塔に似た姿をしている。要するに、四大陀羅尼各一本を九十九基の小塔に入れ、その中心に「百節塔」として六度(または大功德聚)を納めた「相輪櫓」を建てたというのが、筆者の仮説である。



#### 4．百万塔は蓮華蔵世界のミニチュア

百万塔が諸寺に分置されたことを疑う必要はあるまい。『続紀』に「分置諸寺」の文言があるばかりでなく、東大寺、西大寺、元興寺、薬師寺、興福寺の五か寺においては、それぞれの寺院史料が独立してこのことを伝えている<sup>11</sup>。ただし、十大寺に各十万基ということを確認する史料は無く、何処を「諸寺」に数えるかも明瞭とは言い難い。さしあたり、いわゆる南都七大寺を中心として、適切な諸所に置かれたと言うほかないであろう<sup>12</sup>。

先に『無垢浄光大陀羅尼経』には延命招福のほか、鎮護国家的な功德が説かれていることを記した。しかし、護国経典は決して『無垢浄光大陀羅尼経』が代表ではなく、『金光明最勝王経』や『仁王経』、あるいは『法華経』など、仏法の威力によって国土や国王が守護されると説くものは少なくない。いずれも相応に大部な経典で、したがって功德も広大無辺に思える。にもかかわらず、短小な『無垢浄光大陀羅尼経』が採り上げられた背景にはそれなりの理由があるろう。ここでそれを考えてみたい。

筆者はその理由を、『無垢浄光大陀羅尼経』がごく短い陀羅尼から成り、大量生産が可能であったためと考える。つまり、歴大な数を諸寺に分置するということが発想としては先にあって、それに適する経文を選択したものと見ている。百万という数は『無垢浄光大陀羅尼経』に説く七十七とか九十九などと比べて文字通り桁違いであり、同経とは全く独立したところから、歴大な数量と諸寺への分置ということが創意されたと思わなければならない。では、どこからそのようなことが案出されたのであろうか。

平子鐸嶺や禿氏祐祥は、先例として『大唐西域記』巻9（摩伽陀国下）に見える優婆塞闍耶犀那（唐名勝軍）の事績を挙げている（文献1・2）。その事績とは、高さ五、六寸の小卒塔婆を作り、その中に経文を書写して納め、三十年間に「七拘胝」（七十万）に達した、というものである<sup>13</sup>。実際、こういったことを情報としては知っていたであろう。しかし、この例はあくまでも個人的な修行のためであって、百万塔とは性格的に隔たりがある。とかく日本の古代史、とくに文化史的事象を云々する際に、西域や中国・朝鮮の先例を挙げ、以ってその淵源と目して事足りりとするような説が見られるのは、十分な考察とは言えまい<sup>14</sup>。

結論から言うと、筆者は百万塔の発想の根源を『梵網経』に説く蓮華蔵世界に求められると考えている。以下にそれを述べよう。

蓮華蔵世界（蓮華台蔵世界）とは次のような世界観である<sup>15</sup>。

我いま盧舎那、まさに蓮花台に坐し、周匝せる千花の上に、また千の釈迦を現ず。一花に百億の国あり。一国に一釈迦ありて、各々菩提樹に坐し、一時に仏道を成ず<sup>16</sup>。

これを図式的に示せば、

盧舎那仏 千花（千釈迦） 百億国（百億釈迦）

となる。同経の巻上には、蓮華一葉ごとに百億の須弥山、百億の日月、百億の四天下、百億の南閻浮提があると説かれているから、われわれが「世界」として認識しているのは、百億国の一つである。そこに一体ずつの釈迦

が現れ、衆生を教化するのだという。凡夫には、別の蓮華はおろか、同じ蓮華の上にある百億国のうちの別の国の存在を知覚することさえできない。その千×百億の国のすべてを盧舎那仏は一つの光で遍く被い尽くす。まことに無量無辺際尊格である。全体として、簡潔明瞭な階層的世界観であることが理解される。

同様の世界観として、『華嚴經』所説の蓮華蔵世界がある。八十華嚴（新訳八十卷本）の華蔵世界品に詳述されるもので、『梵網經』の蓮華（台）蔵世界とはやや趣を異にする繁密な説である。しかし、法蔵の『華嚴經探玄記』に「蓮華蔵莊嚴世界海に三種あり、一に蓮華台蔵世界」とあって、華嚴宗の側でも『梵網經』の所説を取り込んでいる。思想的には本質的に共通だということであろう<sup>17</sup>。

この世界観を最も端的に具現しているのが東大寺の大仏（盧舎那仏）と、その台座蓮弁に施された線刻「三千大千世界百億須弥図」である。開眼後に刻入されたものであるにせよ、この大仏が『梵網經』の説くところを如実に表していることに変わりはない<sup>18</sup>。大仏造立の思想的典拠としては、『華嚴經』に基づくとする説と『梵網經』に拠るとする説とが提示されているが、その差異を論ずることにあまり大きな意味はないと考えられる。もともと『梵網經』は戒本の部類であって、經典とは異なる。強いて言えば、盧舎那仏という尊格そのものは『華嚴經』を典拠としつつ、全体の構想は『梵網經』に依拠したということであろう。あるいは、次節に述べるように、途中で『華嚴經』から『梵網經』へとシフトしたのであろう。また、『梵網經』が中国唐代に作為された偽經であることもすでに定説となっているが、それは現代の仏教学・仏教史

での話である。当時の人々の間では「仏説」として扱われていたわけで、南都の護国仏教の根幹をなす重要經典としての位置付けを揺るがすものではない。

さて、何故に蓮華蔵世界観による大仏が造立されたかというに、それが律令制的支配構造の在り様と重ね写しになったためである。再度、図式的に示せば、

盧舎那仏 千花（千釈迦） 百億国（百億  
釈迦） 衆生

天皇 国（国司） 郡（郡司） 公民

天皇 上級官司 下級官司 官人

このような階層的支配構造の投影、もしくは逆にそれを正当化するものとして、仏典に説くところの蓮華蔵世界が意識された。そして頂点に位置する天皇が自ら利他の菩薩行を実践し、仏教を保護し流通せしめることにより、国家の安泰・五穀豊穡が実現されるという、いわゆる皇帝菩薩思想に基づく正法治国の理が信奉されたのである。近世以前の我が国の仏教は終始ほぼ一貫して国家仏教であったと言えるが、奈良時代のそれを特徴付けているのは、『梵網經』ないしは『華嚴經』に基づく蓮華蔵世界観と、天皇によって実践される菩薩行とであり、百万塔の造立も同じ仏教史的脈絡の中において解釈すべきであろう<sup>19</sup>。

また、同じことは寺院や僧侶の在り方にも投影されてくる。まずは国分寺制。天平13年（741）に国分寺造立の詔が発せられた。その本尊は釈迦像である<sup>20</sup>。国分寺には国師が派遣され、管内の寺院・僧尼を監督することになっている。一方、京内の場合には、僧綱・僧



正・僧都・律師）が寺ごとの三綱（上座・寺主・都維那）を監督し、三綱を通じて衆僧を統括する。

東大寺 = 総国分寺（盧舎那仏） 国分寺  
（釈迦） 諸寺（各本尊） 衆生

天皇 国分寺（国師） 地方諸寺（三綱）  
衆僧

天皇 僧綱所（僧綱） 京内諸寺（三綱）  
衆僧

とすると、百万塔造立の背景となった考え方も見えてくるように思う。まず頂点に位置する発願者称徳天皇、これが盧舎那仏に当たる。次に安置先の十大寺、これらが千の蓮華に相当する。そしてそれぞれの寺に配られた小塔は、小なりといえども一つ一つが各蓮華に百億ありという仏国土を表象する。このように見ては如何であろうか。

称徳天皇 十大寺 各寺十万基ずつの小塔

そして、もう一つ興味深いことを指摘しよう。蓮華蔵世界の「千花」と安置先の「十大寺」とを比べれば、その数は百分の一。同じ比率で「百億国」を百分の一にすると「億」。漢字「億」は古くは十万を表した。つまり、百万塔を十か寺に十万基ずつ分配すると、数が合うではないか<sup>21</sup>。一見、埒も無い算術のように思われるかもしれないが、典拠の『無垢浄光大陀羅尼経』に出てこない二点、すなわち、百万という途方も無い大数、諸寺に分置すること、この二つが何に拠って発想されたかと考えるとき、上に記した数の一致

は偶然とは思えない。要するに百万塔は、蓮華蔵世界を数的に百分の一にしたミニチュアだったのである。

さらに言えば、頂点を称徳一人に限定する必要もないのかもしれない。天皇自身、国家の繁栄という観点からすれば、自身一代に止まることなく、代々にわたって受け継がれることを願っていたであろうし、鎮護国家の仏の威光という意味では頂点はやはり教主盧舎那仏であってよい。また単に恵美押勝の乱に関わる営為とのみ考える必要もない。直接的には乱の平定が契機であったにしても、永遠不滅の仏教国家実現の夢がそこには託されていた。百万塔の造立は、国分寺制や東大寺大仏と連鎖する、すぐれて国家仏教的な事業として位置付けられるのである<sup>22</sup>。

## 5. 建築者は誰か？

最後に、そのような思想を誰が当時の宮廷に浸透させたのか、という点について。

百万塔の発願者が称徳天皇であることは疑いない。とかく称徳というと、かの道鏡との醜聞が想起され、実際、道鏡を目して百万塔事業の推進者とする見方もある<sup>23</sup>。たしかに、百万塔についてのみ考えるならば、時期的に見て、道鏡の建策と言うこともできよう。しかし如上の拙論により、百万塔の思想的背景が『梵網経』所説の蓮華蔵世界に求められること、東大寺大仏や諸国国分寺の制と共通の根源から発していること、などが理解されたと思う。すなわち、この三事業を一連の動きと見、その推進者たる聖武天皇、光明皇后、孝謙天皇（聖武と光明の間に生まれた皇女。後に重祚して称徳天皇となる）、これらを悉く視野に入れた上で、この思想を宮廷に示した人物について考えねばなるまい。称徳と道

鏡との結合だけでは、国分寺や大仏との連絡が説明できないのである<sup>24</sup>。

時間的には、天平13年(741)2月の国分寺造立詔が最も早く、次いで大仏造立詔(同15年10月)の順となるけれども、盧舎那仏造像の構想が同12年2月の河内国智識寺への行幸に由来していることは広く認知されている<sup>25</sup>。一方、百万塔の発願は、その直接の動機が惠美押勝の乱平定にあるところから、おそらく天平宝字8年(764)9月に相違ない。したがって、天平12年から天平宝字8年まで25年間にわたって宮廷に対する発言力を持ち続けた僧侶があれば、その人物が件の候補となるであろう。

筆者はその候補者として良弁を提案する。以下、その理由を述べよう<sup>26</sup>。

河内智識寺への行幸ののち、同年、大安寺審祥を講師、慈訓・鏡忍らを複講として『華嚴』(旧訳六十華嚴)の講経が発足する<sup>27</sup>。三か年を経て終わり、以後も慈訓らを講師として継続された。これを始めたのが、当時、金鐘山寺(東大寺の前身寺院)に住した良弁である。ゆえに日本の華嚴宗では、審祥を始祖、良弁を檀主としている。良弁は玄昉や行基らとともに法相宗の義淵の弟子とされ、審祥から華嚴を学んだ。彼自身はとくに華嚴の学匠というわけではなく、コーディネータ的な手腕に優れていたものと見られる。

一方、石田瑞麿は『梵網経』の重視が唐僧道瑿の律師補任(天平勝宝3年4月)と時を同じうしていることに注目している。道瑿は天平8年(736)に来朝して『華嚴経』の章疏類を請来したほかに、大安寺において『梵網経』を講じ、その注釈書をも著している。『梵網経』の流布に与って力のあったことは疑いない。そして大仏の開眼会に際しては祝願師

を務めた。しかしながら、道瑿は天平宝字4年に没するので、百万塔に関しては直接の建築者とは考えられない。

ところが、ここにも良弁の影が見え隠れする。良弁は大仏開眼供養の後、東大寺別当に任ぜられたが、それに先立つ天平勝宝3年(751)5月、『梵網経』を写さしめたことがあり、これは道瑿の律師補任の翌月に当たる。良弁の東大寺別当への補任については開眼会の前とする史料もあり、いささか不確定要素もあるが、要するに大仏プロジェクトの事実上の指揮権者である。その良弁が、道瑿の律師補任と前後して『梵網経』に着目している点、甚だ興味深い。造仏と開眼会の準備とが進む間に道瑿からの影響を受け、『梵網経』に注意するようになったものと考えられる。

筆者の見るところでは、大仏の思想的背景は始めは『華嚴経』であったが、良弁と道瑿とが交流したことにより、中途から『梵網経』にシフトしたのではないかと思う。経典を見れば了解されるように、『華嚴経』の蓮華蔵世界はすこぶる繁にして難解、それに比して、『梵網経』の蓮華(台)蔵世界は実に簡にして端的である。前述した律令制社会との重ね写しをイメージすることは『華嚴経』の所説では少々難しく、『梵網経』の蓮華蔵世界にして初めて可能となる。良弁はその点に気付き、巧みに思想基盤をシフトさせたのであろう。もともと『梵網経』は、華嚴思想に中国風の道德観を加味して作爲された戒本なので、支障なく転移しえたのである。

良弁は天平勝宝8歳(756)5月、病の床にあった聖武太上天皇の看病禪師としての功績を認められて大僧都となる。そして聖武が崩御すると、12月、皇女孝謙天皇は菩提を弔うべく、六か寺に遣使して『梵網経』を講ぜし

めた。その詞に曰く、

聞くならく、菩薩戒をたもつことは梵網經を本とす。功德巍巍として、よく逝く者を資くと。仍て六十二部を写さしめ、六十二国に説かしめんとす。四月十五日より始めて、五月二日に終えしめよ。

講師六十二人とある人数からすると、純然たる講經というよりは写經に力点をのいたものであろう。さらに、翌年の一周忌に際して『梵網經』による齋会を設けた。女帝に、同經に基づく国家仏教的思想が浸透していたことが看取されるが、「聞くならく」という、その建言をしたのは、父帝の看病禪師にして『梵網經』に傾倒していた良弁に他なるまい。

天平宝字5年(761)、良弁は東大寺の別当を辞し、石山寺の建立に尽力するようになるが、これは当時、保良宮に在った孝謙上皇のための祈願所という性格をもつものと考えられている。上皇と道鏡との関係が生ずるのはちょうどこの頃からである。やがて成立した道鏡政権下では、かつて良弁のもとで共に華嚴を鼓吹した慈訓や慶俊らは僧綱の任を解かれるなど、総じて不遇であった。しかし良弁は生き永らえる。それどころか、道鏡自身、はじめ義淵の弟子、のち良弁の弟子となる、とされるように、むしろ良弁が道鏡に背後から指示を与えているようにさえ見える。良弁はこの後も宝龜4年(773)まで存命で、宮中内道場において依然として隠然たる勢威を保っていたのである<sup>28</sup>。

そこで筆者は、良弁が初めて僧正として史料に現れるのが神護景雲4年(770)5月である点に注目する。これは百万塔完成の翌月ではないか。百万塔の完成と良弁の任僧正とが

近い時期であるということは、これが論功行賞の人事であったことを示唆し、つまりはこのプロジェクトの推進者もまた良弁であったことの証左と言えよう<sup>29</sup>。

もう一つ良弁について付け加えておくと、その写經や請經の様子からして、雑密にも関心の深かった様子が窺われる。とくに、天平勝宝3年の『六字呪王經』書写、翌年の『尊勝陀羅尼經』書写などが注意され、百万塔の『無垢淨光大陀羅尼經』も彼にとっては強ち突飛な思い付きではなかったのである<sup>30</sup>。

以上のように、聖武天皇の発願に係る大仏と国分寺制、称徳天皇による百万塔、三十年近くにわたって続けられたところのこれら三大事業は、おそらく良弁の建策・主導によるものと考えられる。南都仏教の世界で高名な僧侶は他にも多々あるけれども、これほどの長い期間、一貫して発言力を行使しえた人物は多くはない。そして彼は、高邁な華嚴思想に基づいて始められた事業の思想基盤を途中で『梵網經』にシフトすることにより、宮廷や廟堂にとっては正に理想的と思われる仏教国家の夢を示すことに成功した。奈良時代の国家仏教の本質が、聖武天皇や孝謙女帝の皇帝菩薩思想、ひいては自らを教主盧舎那仏と一体化して観ずる壮大なる幻想にあったと見るとき、良弁と『梵網經』こそがその柱だったのである<sup>31</sup>。

## 6. むすびに

百万塔は美術品蒐集家にとって垂涎的。日本美術の蒐集に少しでも関心のある者は、遅かれ早かれ、一つ持ちたくなるという。その魅力は、古朴ながらも瀟洒な、あの独特の雰囲気にあるのであろう。均整のとれた轆轤挽きの出来、素木の質素な美しさが、日本の

感性をくすぐるのかもしれない。

これまで最も頻繁に検討されたことは、世界最古の印刷物としての陀羅尼の印刷技法についてであった。すなわち、木版か銅版か、整版か活字版か、など。それらもそれなりに興味ある重要な問題には相違ないけれども、不思議なことに、百万塔造立の背景が論じられることはほとんどなかった。本稿ではその点に反省を促しつつ、百万塔のもつ仏教史的意味を提示できたと思う。国分寺制、東大寺大仏、百万塔を、言わば三位一体の国家仏教プロジェクトとして位置付けたのである。

法隆寺に現存する百万塔は、同寺の昭和資財帳編纂事業の一環として、奈良国立文化財研究所（現、奈良文化財研究所）が詳細に調査した。その報告はすでに刊行されたが、全容の公開とは程遠いものであった（文献5）。とくに、9割方の遺品に存するとされる墨書銘は、わずかに1割強が掲載されたに過ぎない。総じて、一たび公刊されてしまうと、たとえそれが不完全であっても、あとは顧みられぬものである。奈文研の何処かに仕舞い込まれているデータが遠からず陽の目を見ることを祈りつつ、筆を擱く。

## 注

- 1 もちろん百万塔は現存しているが、残存数は全体の5%にも満たない。しかも、諸寺に分置された（それは史料上、確認される）にもかかわらず、現在は法隆寺にのみ伝来する。細かに言えば、近年の法隆寺昭和資財帳編纂に伴う調査において、塔身部45755、相輪部26054、陀羅尼3962という数が挙げられている。明治期に頒布されて諸家に蔵する分（予定数で1400）を合わせても5万に及ばない。陀羅尼に至っては、総数の0.4%。つまり、百万を諸寺に分置したと伝えられる大事業の遺品

としては、限られ、かつ偏った標本である可能性を否定できないのではあるまいか。本稿も含めて、何を論ずるにも、その地平線の内側での話であることを認識しておく必要がある。

- 2 厳密に区別する場合、『梵網經』所説のものは「蓮華台藏世界」と呼ばれる。しかし、後に本文で述べるように、両者の思想基盤は同一であって、仏教辞典の類でも項目としては「蓮華藏世界」を立て、その中に蓮華台藏世界をも記述している。よって本稿では、総称的に「蓮華藏世界」の語を用いる。
- 3 鎌田茂雄ほか『大藏經全解説大事典』（東京、雄山閣出版、1998）の同經の項（苦米地誠一担当）によれば、長安4年（704）の年紀が与えられている。日本では慶雲元年。
- 4 『無垢浄光大陀羅尼經』の本文は『大正新脩大藏經』1024（第19巻密教部2）に収める。また訓み下し文が『国訳秘密儀軌』第28巻（那須政隆監修。東京、国書刊行会、1974）にある。後出の訓み下し文はこれを基として、私見によりやや改めた。さらに、陀羅尼の口語訳が文献3（163頁）にある。
- 5 原文は『新訂増補国史大系』による。その376頁。底本は宮内庁書陵部蔵谷森本。最近の『新日本古典文学大系 続日本紀 四』でも同じ（280頁）。こちらの底本は蓬左文庫本。新古典大系では諸本間の校異をいくつか指摘しているが、内容上、影響は無い。また、ほぼ同文の記事が嘉承元年（1106）成立の『東大寺要録』巻一（本願章第一）にも見られるけれども、明らかに『統紀』からの引用転載と考えられるので、史料は『統紀』が唯一と言ってよい。この点、平子鐸嶺が両者を独立した証拠として扱っているのは誤り。平子の掲出する『統紀』は原文そのままではなく、その上で「『要録』の記載は強ちに『統紀』の抜抄とも見えざれば」と評しているのは穏当でない（文献1、2丁オ・7丁オ）。
- 6 「其径三寸五分」は塔身基底部の直径と一致する。「高各四寸五分」は総高ではなく、相輪部を除いた塔身部のみの高さに等しい。また現存する陀羅尼は、根本、自心印（慈心）、相輪、六度の四種で



- ある。
- 7 原文は藤田経世『校刊美術史料 寺院篇』上巻（東京、中央公論美術出版、1972）による。その55頁。「故号小塔」の下、「院」脱か。および「浄光」の下、「大」脱はママ。
  - 8 増田報告（文献6）によれば、静嘉堂文庫所蔵の遺品に付属する包紙は、概ね陀羅尼本文料紙と同時代のものと思われるという。しかし、そのことが直ちに、包んだ状態そのものが元のままであることを証するわけではない。仄聞するところでは、明治期の頒布に際して、状態のよいものを適宜に取り合わせたらしくもある。
  - 9 法隆寺現存分の数。鬼頭清明による（文献5、114頁）。
  - 10 小塔の経巻孔は四本を納めうる大きさではない、という反論が予想される。しかしそれは、一本ずつ包紙で巻いた姿が奈良時代の原状のままであることを前提としているのであって、前述の如く、その点は必ずしも十分に証明されているように思えない。四種を重ねてひと巻きにすれば、容易に経巻孔に納まるはずである。もっとも、前出『七大寺巡礼私記』に「五真言のうち其の一本を納む」と見えることも難点ではある。「五真言」の徴証として引いた以上、これを伝聞記事なりとして退けては、自己撞着に陥ってしまう。
  - 11 これら寺院史料の典拠は文献5の105頁に列举されている。また、文献1は一とおり原文を掲出する。いずれも寺院史料としては比較的良質の文献とされるが、早いものでも11世紀前半の成立であって、つまり、百万塔の造立から二百数十年を経た後の、二次的編述史料であることに留意する必要がある。
  - 12 十大寺に分置したことを明記するのは、『東大寺要録』・『薬師寺縁起』、十万基あることを記すのは、『興福寺流記』・『薬師寺縁起』である。元興寺については『七大寺巡礼私記』に「八万四千」と見える。そのほか内裏にも置かれたことが指摘されており、一律に「十か寺に十万ずつ」とは言い切れない。
  - 13 大正蔵2087（第51巻史伝部3）920頁。
  - 14 比喩的に言うならば、生命の宇宙起源説のようなものである。すなわち、生命がどのようにして誕生したかという大問題に対する答えとして、宇宙からやってきた、と説くものがある。しかし、これは問題の解決を先送りしただけであって、結局、もとの宇宙においては生命がどのように誕生したのか、に答えていない。別の土地に先例のあることを指摘するだけでは、有効な解答とはならないのである。仏像でも絵画でも、模倣ならば模倣として、それを採択・受容した人間の意思を考察する必要があるろう。
  - 15 仏教の術語が「蓮華蔵世界」なので、ここでは「世界観」の語を用いるが、むしろ宇宙観というほうが適切であろう。さらに言えば、過去・現在・未来の三世にわたるので、時間をも含めた四次元概念である。
  - 16 『梵網經』梵網經盧舎那仏説菩薩心地戒品第十の本文は大正蔵1484（第24巻律部3）に収め、この詩偈はその巻下（1003頁）にある。訓み下しは『《佛典講座14》梵網經』（石田瑞麿。東京、大蔵出版、1971）に拠った。  
 なお、ここで釈迦とは、仏教の開祖たる人物の固有名詞ではなく、智慧を完成させ、衆生を教導くことのできる者を意味する。
  - 17 両經に説く蓮華蔵世界については、各宗各師ごとに解釈の異なる部分がある。しかしここで重要なことは、盧舎那仏を頂点とするピラミッド型の階層的世界観が描かれている点であり、その点に関する限り、異見は無い。
  - 18 大仏の開眼供養会は、未完成のまま、天平勝宝4年（752）4月9日に挙行された。これは発願者たる聖武太上天皇の病ゆえに急いだためで、鍍金の完了はその3年後、光背の完成は実に19年後（宝亀2年）であった。
  - 19 思想的に言えば、この「菩薩」とか「利他」ということこそ、大乘仏教の要諦である。現代でも法要の最後に読み上げられる廻向文、「願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道」、あるいは「願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂国」には、それが端的に凝縮されている。
  - 20 国分寺造立詔そのものには本尊に関する規定は無いが、それに先立つ天平9年3月、諸国に釈迦



像を造らしめたことがあり、これが国分寺の本尊とされた。このあたりの経緯については、吉川弘文館版『国史大辞典』国分寺の項（井上薫担当）が最も的確にまとめられている。

- 21 億が古くは十万を指したことは多くの字書に見える。たとえば諸橋『大漢和』の字釈では、『詩経』大雅、假楽の箋に「十萬曰億」、『国語』楚語下の注に「十萬曰億、古数也」、『礼記』内則の疏に「億之数有大小二法、小数、以十為等、十萬為億」など。和辞書で古い例としては『色葉字類抄』（平安末期成立）に所見がある（黒川本67才 中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄 研究並びに索引』本文・索引編（東京、風間書房、1964）197頁）。また、観智院本『類聚名義抄』でも「億」の分注に「十万」とある（仏上3）。
- 22 思想的背景に関する他の見方の一つ挙げておく。松村恵司は「相輪」の中に、小泥塔を造って中に陀羅尼を安置すれば九万九千の小宝塔造立と同じ功德がある、と説かれていることに着目し、百万では九百九十億の塔婆造立に相当するという数の大いさと、一か寺分の九十九億が「自心印」を説いたとされる九十九億諸仏に通じるという点を指摘している（文献4）。傾聴すべきものではあるが、四種陀羅尼の一つの「相輪」の供養法を全体構想として敷衍することは蓋然性が低く、またこれのみでは分量の必然性が十分に説明できないように思われる。
- 23 たとえば吉川弘文館版『国史大辞典』道鏡の項（横田健一担当）など。
- 24 孝謙上皇が道鏡を信任するようになるのは、天平宝字6年（762）4月に保良宮滞在中の上皇を看病してからのこと。また、経歴上の初出は天平19年（747）このとき「沙弥」（一人前の僧侶ではない）とある。ゆえに、同13年の国分寺、15年の大仏などに容喙しうる立場ではない。
- 25 『続紀』天平勝宝元年（749）12月丁亥（27日）条の宣命に、「去る辰年（天平12=740）河内国大県郡の智識寺に坐す盧舎那仏を礼み奉りて、則ち朕も造り奉らむと思えども、えせざりし間に…」と見ることが根拠となっている（国史大系本206頁）。2月ということは明記されていないが、同

月の難波宮行幸の途次と見るのが妥当であろう。なお、この宣命は聖武の譲位後なので、「朕」を孝謙と見、ひいては大仏造立が孝謙の発意であったとする説（川崎庸之）もある。しかし仮にそうとしても、大仏造立や国分寺造営はあくまでも聖武の詔として発せられている。聖武か孝謙かの詮議でなく、光明皇后も含めて三人の、一致した意思と見るべきであろう。

- 26 煩を避けて史実の出典を一々に示さないが、いずれも古代史家には十分に認められている事々である。典拠に興味のある向きは、竹内理三・山田英雄・平野邦雄『日本古代人名辞典』（東京、吉川弘文館、1958～77）を参照されたい。これには全ての典拠が掲げられている。
- 27 河内智識寺は大阪府柏原市太平寺2丁目に金堂址等を残す廃寺で、知識集団の寺であった。知識（善知識）とは、善なる行いに導いてくれる、もしくは、ともに行う友人という意味の仏教語で、knowledgeの謂ではない。そうした篤信者の、信仰を紐帯とする結合を知識集団または知識結（ゆい）と呼ぶ。「知識人（intjelligencija）の集団」ではない。畿内、とくに河内国では渡来系氏族を中心として、このような活動が活発であった。彼らの多くは優れた技能者であると同時に、仏教思想の面でも先進性が強く、『華嚴経』・『梵網経』の思想なども平城京内より早くから浸透していた。たとえば西琳寺（大阪府羽曳野市）においても、天平15年（大仏発願の年）以前に盧舎那仏が安置されていたことが知られる（『西琳寺文永注記』所引「天平十五年帳」）。同寺はやはり渡来系の西文（かわちのあや）氏の氏寺である。また、彼らは積極的に大乘菩薩道、すなわち利他行を実践した。ここに名を挙げた慈訓（船氏）や同時期の慶俊（藤井氏）など、聖武朝から仲麻呂政権期に活躍した僧侶には、出自や活動において知識集団と関わりのある人物が多い。
- 28 称徳・道鏡政権下では、師の良弁よりも道鏡が大きな権力を握っていることは事実である。そして、百万塔と同じく押勝の乱に際して称徳が発願した西大寺の建立や、僧寺の西大寺に対する尼寺としての西隆寺の建立、さらには容易に進まぬ国

分寺造営などを、道鏡が督励していることも知られる。西大寺は東大寺に対抗する意図があったと言われ、東大寺（総国分寺）法華寺（総国分尼寺）に対して、西大寺 西隆寺という構図も理解できる。一方の良弁は、言わば東大寺造営に半生を捧げたわけで、その意味で、師弟は拮抗しているように見えないこともない。また、百万塔発願の前年（天平宝字7年）5月、東大寺に対して『無垢浄光大陀羅尼經』を奉請する宣が出された。これは道鏡の申し入れによるもので、このことから禿氏祐祥は百万塔の進言者を道鏡と見ている（文献2、21頁。もっとも、翼賛者として良弁の名も挙げている）。しかしながら、根底に横たわる思想の一貫性を軸として考えれば、根本のアドバイザはやはり良弁であって、道鏡は師良弁の示した蓮華蔵世界を実現するために邁進したものと筆者は見たい。

なお、この請経からは、百万塔発願の契機が押勝の乱以前にあった可能性も感じられるが、そうであっても一向に差し支えはない。否、本稿所説にとっては、むしろそのほうが都合がよろしい。蓮華蔵世界の構築という命題は、普遍性をもっていたはずである。

- 29 神護景雲4年5月に「僧正」と記す典拠は正倉院文書。一方、『僧綱補任』では宝龜2年(771)任、『東大寺要録』・『東大寺別当次第』では宝龜4年任とする。一般に、一次史料である文書のほうが二次的編述史料よりも同時性が強く、したがって信憑性も高い。宝龜2年としてもすぐ翌年で、論功行賞としてはありうべきことである。
- 30 最初に記した如く、『無垢浄光大陀羅尼經』を日本に請来したのは玄昉と考えられている。良弁と玄昉とが同門（義淵の弟子）であったことも、良弁が本經に着目した一因であろう。
- 31 道鏡が帝位を覗ったことも同日の談かもしれない。帝王を盧舎那仏と一体視するならば、俗人の天皇よりも僧侶たる自身のほうが、はるかに相応しい、そのように道鏡は信ずるに至ったのではあるまいか。単なる権力欲を超えた想いが彼の心底に潜んでいた可能性がある。

## 参考文献（刊年順）

- 文献1 平子鐸嶺『百萬小塔肆致』（東京、平子尚、1908）
- 文献2 禿氏祐祥『百萬塔陀羅尼考證』（京都、泉山堂、1933）
- 文献3 中根勝『百万塔陀羅尼の研究』（其刊行委員会発行。東京、八木書店、1987）
- 文献4 松村恵司「百萬塔調査の成果と課題」（法隆寺昭和資財帳編纂所『伊珂留我』8（東京、小学館、1988））
- 文献5 法隆寺昭和資財帳編集委員会『法隆寺の至宝』第5巻（東京、小学館、1991）
- 文献6 増田晴美「静嘉堂文庫所蔵の百万塔及び陀羅尼について」（古典研究会『汲古』37（東京、汲古書院、2000））